

それだけ働き方改革

社員が退社後や休日に副業する。お金のため仕方ないことである。ある地方メーカーの専務が怒っていた。「毎日早く帰るし農繁休暇もとる。親に聞くと毎日夜は遅いし畑を手伝ったことはないという。毎日パチンコしてたんです」。この社員を人材として肯定するのが働き方改革なのか。

経営管理講座 348 染谷和巳

乗車拒否奨励のタクシー会社

タクシー。手を挙げると「回送」で行ってしまう。また「回送」つぎも「回送」。いくら待っても来ないので駅まで歩いてやっと乗った。

「何で回送ばかりなんだ」と聞くと、頭のいい説明のうまい運転手がこう答えた。「会社によって勤務のシフト時間は違いますが、時間厳守はここも同じです。特に遅刻がうるさい。ウチの場合、一時間の遅刻が月三回あると減俸です。出社時ではありません。帰社時の遅刻です。決められた時間に会社に戻る。会社への帰り道を客を拾ってもし帰社時間が遅くなったら処罰される。だから「回送」の札を出して一日散に帰るんです」

「もし遅方までの上客だったら大損じゃないか」
「はい、今はルール最優先なんです。以前は水上げ（売上げ）一辺倒でした。今は安全と従業員の健康が第一で、売上げはうるさく言われません。お客様第一主義ではない。客がいても乗せない。たとえば東京のタクシーが茨城まで客を乗せて行ったとします。帰りは空車だから客を乗せればむだにならない。万一東京へ行く客ならタクシー。そんなことは本当に万一度です。行き先を聞いて「行か

れません」では乗車拒否になる。乗せた客が茨城県内で降りたとしても。これがルール違反。これが売上げ記録に残ります。上司はそれを見て叱責、もう一度あれば処罰される。だから「回送」で都内まで戻ってきてから「空車」にする。営業地域が決まっています。地域外で仕事ができない。つまり「回送」は乗車拒否のサインです。これがルール第一の今のタクシーの現状です」

以前は帰り際に一万円二万円の遠方客を乗せると一日がバラ色になった。二時間遅れて戻ると上司が祝福してくれた。今は、不良ドライバーの烙印を押される。「手書きで営業報告書を記入していた時はこんなことはなかった。今も手書きのタクシーはありますがそういう会社はルールはおろかです。売上げが自動のレコーダーになってから管理が厳しくなりました。会社は本音は売上げを伸ばしたいが、労働基準監督署や国交省が調べる。労働時間を守っているか、過重労働させていないか、地域外で稼いでいないか。レコーダーをチェックすればみな判つてしまう。役所に睨まれると、指導、勧告など段階があるが、ブラックリストに載って、最悪の場合、免許停止になる。そのため経営者は「乗車拒否しているから時間どおり戻って来い、地

域外の遠方からは客がいても乗せないで回送で帰って来い」とドライバーにうるさく言っているんです」

タクシー業界が勤務時間と勤務地域に厳格になったのは最近のことだろう。そう、「働き方改革」が主要政策として登場してからである。厚労省、文科省、国交省やその下部行政機関が会社の調査と指導に走り回るようになったのはこの一年前からである。以前から労働環境劣悪と言われていたタクシー業界は役所にとっても指導のしがいのある相手で、みるみる成果が上がり、売上げ第一、お客様第一を吹っ飛ばして、勤務時間縮小第一の優良企業に変えることができた。

もう一つタクシー。霞が関で「国立劇場まで」と言ふと運転手から「すいません、私二日なんです。ナビに入れているんで住所解りますか」ときた。新潟から出てきて二日前に入社。今日は地理を覚えるため走っ

てこいと言われたので出てきた。あなたが初めての客だと言う。「長距離トラックやっていたんですが、四十になりましたね、ここが人生の転機じゃないかと思つたんです。体がきつくてこれから十年二十年続けられるか考えたら自信がなくて、それで決断してタクシーに変えたいんです」

運輸業界はいずれも労働条件、労働環境がよくない。特に長距離トラックは十時間、十五時間ぶっ続けて走り、十分な休息をとれずにまた帰りの荷を積んで長時間走る、を繰り返す。体力のある若いうちは持つが、中年以上になると持たない。その点タクシーは六十七十になっても務まる。この運転手も働き方改革できた。運送会社も働き方改革のターゲットになつていて、個人事業や零細中小が多く、行政の指導が追いつかない。この業界がタクシーのようにお上から「合格」の印をもらえるのはいつのことか。

「働き方改革って働かない改革もしくは働くな改革ですね」と荒田がニヤニヤ笑いながら言う。「そうだと思うが、それがどうした」と聞くと荒田、

残業を減らして副業に勤む？

「過労死ライン残業八〇時間と決めて労働時間を削り、プレミアムフライデー、第四金曜日は午後三時に業務を終了して社員を解放

ら一点集中で働いてくれ、会社以外の仕事と収入は認めない」ということ。

待遇不十分な中小企業ではなく優良大企業や公務員の話である。しかし今まで中小企業でも社員は副業は会社に隠してコソコソやっていた。それを今後は公然としてよいという。改革である。荒田は三〇歳で三人の子持ちになつていて。給料だけでは生活できない。週四日夜三時間他の雑誌社の編集の仕事をした。「あの頃はよく働いてくれたね」と今も妻が言う。

三十五歳の時新聞社から連載コラムを依頼され社長の許可を得て書き始めた。週一回、一回五千円のアルバイトである。五年間続いた。月二万円は荒田の小遣いになつたが、その分給料は家計に回せたので妻は喜んだ。四十一歳の時そのコラムが単行本になり二万五千部売れて二百五十万円の印税が入った。社長は印税の額を聞いて「何だ、その程度か、ならいい」と言った。一千万円ももらっていたら半分会

しろとママゴトみたいな余計なお節介りです。そうしたら今度は副業を奨励せよ。だって。矛盾してませんか。浮いた時間でもうひとつ別の仕事したらどうか、ヨソで働いて言うんですから」。会社は規則であるいは慣例として副業を禁止しているところが多い。「会社が十分な報酬を出すか

指導者の力量が問われる時代

安易な妥協、そして会社に三%の積上げを要請する安倍総理大臣の社会主義的判断。いづれも社員、市民、国民が全幅の信頼を寄せることができる指導者とはいえない。指導者次第で会社や国の行く末が決まる。日本本来の思想に基づいた日本の経営を軽視し見捨てて、目先の損得に色めく指導者に将来を任せることはできない。日本の経済を支えているのは会社である。役員が会社を指導監督すればするほど、タクシー業界のように会社の活力が削がれる。大風呂敷を広げたが言いたいのは、パワハラ禁止法にしろ副業奨励にしろ、働き方改革は国を減らす危険を孕んでいるということだ。

社へ戻せと言うつもりだったので。以後現在に至るまで荒田は会社勤めでありながら年末調整は行わず「二カ所以上から収入がある人」が行う。確定申告。を入れている。荒田は副業で家族を養つてきた。もちろんコソコソであり、社長の許しを得てである。社長が「ダメだ」と言ったら荒田はどうしたろう。

それが、副業解禁、副業奨励、に変わる。「早く帰って別の仕事をしたいよ」になる。荒田は会社に戻らぬ気持ちは持ち続けたが、これからは堂々と「今夜はここで働いています」「土日日はここでアルバイト」と言える収入を得ている人も会社で公然と自慢できる。

お金と時間だけを見ればこれでもいいが、残業を減らして生産性を上げるといふ改革本来の目的と、会社に対する忠誠心といった観点に立てば、これも「日本の経営」を敵とする一つの方策であることが解る。